荒潮繞る北 の時いと高 の郷

夢にまどろむ春の精 看よ極光に照らされて

矜る血潮に求め来て ほこ ちしほ もと き 呼感激 の経営を

十ぱゅういち 澄明の府霊清しちょうめい

の年の旦暮は

夏なっ の日悠然に石狩の

浩ラとう 流光高く際涯なき 自然の業を畏れずや の水煌めきて

荒<sup>ぁ</sup>れ 暮れ行く蛮霧に包まれて 狂ひたる 3戦場の跡 <sup>こばのあと</sup>

Ŧi.

北風胡沙に雪を捲き

の都今静か

至し 福く 清けき永久の霊泉のまは、れいせん の水を掬ぶ可く

黄<sup>こ</sup> 金<sup>ゅ</sup> の しく唱はなん 甕 守りつつ

夕き ñ . 呼ょ ば 3 関か 古鳥

稜畳として唐錦 遠鳴くなべも紅葉し 冥想ここに始めよと

曲勇ましく唱はなむ 潔き生活の道すがら 熱の磅礴に生立た智慧の光に導か ちて か ñ